

日常的な相互参観を基盤にした、学び合う校内研究の構築

一視点を明確化したワンシーン・チャレンジシートによる、見せ合う・語り合う研究授業の取組を通して一

石巻市立山下中学校 小林 満

1 研究の主題と背景

中学校学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」を通じて、これからの社会を生きる力を育成することが求められている。その実現に向けて、校内研究は学校全体で授業を見直し、組織的に改善していくための重要な仕組みである。特に、研究授業は授業実践を共有・検討する場であり、教員の専門性を高める要となる。

山下中学校の校内研究は、令和3年度から3年間、「主体的に学習に取り組む生徒の育成」をテーマとして取り組んできた。協働学習を取り入れることで、仲間と学び合う姿勢は育ってきたが、自ら課題を見付けて取り組む力や、粘り強く課題に向き合う力に課題が残った。また、全国学力・学習状況調査の結果等からも、基礎的な知識は定着している一方で、応用力や発想力に課題があることが示された。

こうした実態を踏まえ、令和6年度より研究主題を「確かな学力を身に付けた生徒の育成」と設定し、新たに3年計画で校内研究を進めてきた。「確かな学力」とは、中学校学習指導要領（総則編、P23）¹⁾に示されるとおり、知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等の3つの柱を総合的に育成し、多様な学びを保障することで、よりよく問題解決する資質・能力までを含むものである。

今年度は校内研究の2年目として、副題に「授業UDの視点を取り入れた授業の工夫を通して」を掲げ、通常学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒を含め、全ての生徒が楽しく学び合い「わかる・できる」授業づくりを進めている。

しかし、本校の校内研究を進める上で、研究授業に伴う教員の心理的負担が課題の一つとなっていた。具体的には、学習指導案作成や事後検討会に関する負担、時間確保の困難さなどが挙げられた。

そこで本研究では、校内研究を特別なものではなく、教員が互いに授業を見せ合い・語り合う日常的な学び合いの場とすることを目的に、研究主題を「日常的な相互参観を基盤にした、学び合う校内研究の構築」と設定した。

そして、上記の心理的負担を軽減し、事後検討における焦点を明確にするために「ワンシーン・チャレンジシート（以下ワンチャレシート）」を導入し、この取組を通して、教員が安心して意見を交わせる

校内研究の仕組みづくりを目指した。

2 具体的な取組

(1) 「ワンチャレシート」の活用

研究授業をより取り組みやすいものとするため、従来の詳細な学習指導案に代えて、「ワンチャレシート」を導入した。授業のねらいを校内研究の視点に絞って整理することで、授業者の意図が参観者に伝わりやすくなり、授業後の指導助言も焦点化されたと考えた。

このシートでは、授業全体ではなく、特に工夫したい一場面（ワンシーン）に焦点を当てて記述する形式とした（図1）。

ワンシーン チャレンジシート	
日 時 令和7年〇月〇日(〇)	
指導者 教 諭 〇〇 〇〇	
場 所 〇年〇組 教 室	
単元(題材)名	さまざまな食品とその選択 本時:「食品の表示と選択」
本時の目標	消費者の要望から目的に合った食品を考察し、それを論理的に表現することができる。
授業UDの視点 (※この視点は仮のものです)	<input checked="" type="checkbox"/> (1)全ての子どもたちが、学びに参加できる授業。 <input type="checkbox"/> (2)多様な学び方に対して柔軟に対応できる授業。 <input checked="" type="checkbox"/> (3)授業や施設に訴える教材・教具や環境設定が準備されている授業。 <input checked="" type="checkbox"/> (4)欲しい情報がわかりやすく提供される授業。 <input type="checkbox"/> (5)間違いや失敗が許容され、執行錯誤しながら学べる授業。 <input type="checkbox"/> (6)現実的に発揮することが可能な力で達成感が得られる授業。 <input type="checkbox"/> (7)必要な学習活動に十分に組み組める課題設定がなされている授業。
検討するワンシーン	<input type="checkbox"/> 【導入場面】 <input type="checkbox"/> 【生徒への発問・指示場面】 <input checked="" type="checkbox"/> 【ICTの活用場面】 <input type="checkbox"/> 【協働学習・協力学習の場面】 <input checked="" type="checkbox"/> 【課題解決学習の場面】 <input type="checkbox"/> 【その他】 ()
検討するワンシーンのおおよその時間 9 時 5 5 分 ~ 1 0 時 1 5 分頃	
具体的な手立て ・オンライン掲示板ソフトを活用させることで、全員の意見を記入しやすくする。また、考察、記入、発表の流れをスムーズにさせる。〔視点(1)、(3)〕 ・提示されたA~Cの消費者の要望を読み解き、食品と見比べて選択し、その理由を考えさせる。その際、適宜ヒントを与えることで、生徒を取り残さず、自分で考える機会を確保する。〔視点(1)、(4)〕	
感想フォーム 二次元コード	参観者用メモ
二次元コード	

図1 「ワンシーン・チャレンジシート」

項目は以下のとおりである。

- ・単元(題材)名
- ・本時の目標
- ・校内研究の視点(授業UD)
- ・検討したいワンシーンの場面と具体的な手立て

以上のように記述内容を焦点化することで、研究授業を準備するハードルを下げるとともに、参観者にも授業のねらいと改善点が伝わりやすくなると考えた。これにより、若手教員にとっては授業公開へ

の心理的負担が和らぎ、ベテラン教員にとっても新たな視点で授業を見直す契機となることをねらいとした。

「ワンチャレシート」の使用法を以下に示す。

まず、年度始めの研究推進委員会などで、その年度の校内研究テーマを基にした「校内研究の視点」を設定し、「ワンチャレシート」の項目に加える。

次に、各教員が自身の授業実践における課題などに合わせて任意のタイミングで「ワンチャレシート」を作成し、参観を希望する教員は研究授業を参観する。

その後は、事後検討会を実施し、参加者全員で研究授業を分析することで、それぞれの立場から授業改善を目指す。

(2) 「校内研究の視点」の明確化

「ワンチャレシート」を作成するにあたり、中学校では、教科による専門性の違いが事後検討会の話し合いを難しくしていることを考慮し、校内研究の視点を明確にする必要があった。そこで、本校の校内研究の副題にある「授業UD」を基に、授業改善の視点を定めた。

その際、菊池哲平（2024）「授業UD新論－UDが牽引するインクルーシブ教育システム－」²⁾で示されている「授業UDの7原則」（長江・細渕、2005）を参考にし、校内研究の視点を整理した。

授業UDの7原則は以下のとおりである。

- ① 全ての子どもたちが、学びに参加できる授業。
- ② 多様な学び方に対して柔軟に対応できる授業。
- ③ 視覚や触覚に訴える教材・教具や環境設定が準備されている授業。
- ④ 欲しい情報がわかりやすく提供される授業。
- ⑤ 間違いや失敗が許容され、試行錯誤しながら学べる授業。
- ⑥ 現実的に発揮することが可能な力で達成感が得られる授業。
- ⑦ 必要な学習活動に十分に取り組める課題設定がなされている授業。

図2 「授業UDの7原則」

これらの原則を参考にし、授業改善の視点を参観者と授業者が共有できるよう、「ワンチャレシート」を設計した。このシートによって、参観時や事後検討の際に共通の視点を持つことができると考えた。

3 授業実践 I

「ワンチャレシート」を活用して研究授業を行い、参観した教員と事後検討会を実施した結果、以下のような成果と課題が明らかになった。

(1) 成果

- ・授業者にとっては、研究の視点が明確で研究授業

の準備がしやすく、事後検討会での助言も的が絞られたものとなった。

- ・参観者にとっては、授業者の工夫したい場面が明示されているため、助言の視点を明確に持って参観できた。
- ・授業UDの7原則を活用したことで、生徒の学習参加や、ICT活用による情報共有の工夫など、学びやすい環境づくりが進んだ。

(2) 課題

- ・研究授業の視点をより効果的なものにするため、授業UDの7原則を本校の実態に即した独自の視点として更に具体化する必要がある。
- ・今回は「ワンチャレシート」の作成者本人による授業実践であったため、他教員が活用した際の検証が必要である。
- ・事後検討会において、「ワンチャレシート」を有効活用するための仕組みが明確でない。特に、授業の参観者が助言者で終わってしまうため、見せ合う・語り合う研究授業の取組に至っていない。
- ・時間の制約から、事後検討会を開くことが難しい場合もあり、検討会の内容や展開も含めた仕組み作りが必要である。

(3) 授業実践 I のまとめと今後の展望

今回の実践を通して、授業UDの視点を検討・共有することで、授業改善の方向性が明確になり、教員同士の学び合いが活性化した。また、「ワンチャレシート」の活用によって、授業者の心理的負担を軽減しながらも、研究視点に沿った研究授業が可能になった。

授業実践IIでは、成果を確認しつつ、課題となった内容の解決へ向けて、以下の取組をしていく。

- ・授業UDの7原則を本校の実態に即して整理・再構成し、「山下中学校版授業UD視点」を策定する。
- ・「ワンチャレシート」を活用した研究授業を、他の教員にも実践してもらい、使用感や改善案に関する意見を募ることで、「ワンチャレシート」をより使いやすいものにする。
- ・参観者が、単に授業への助言を行うだけでなく、その授業から得た工夫を自身の授業改善に生かす具体的なプランまで報告できるような、事後検討会の仕組みを構築する。

4 授業実践 II

授業実践Iの成果と課題を踏まえ、授業実践IIでは研究主題の実現に更に迫るため、次の3点の取組を行った。（学習指導案を参照）

(1) 「山下中学校版授業UDの視点」を策定

これまでの授業実践では、授業UDの7原則（図2）を共通の視点として用いてきた。しかし、授業改善を学校全体で継続的に進めるためには、本校の実態に即した視点の設定が必要であると考えた。そ

ここで、これまでに本校で蓄積した校内研究の内容や、教師・生徒へのアンケート結果などを基に検討を進め、授業UDの7原則（図2）のうち①～⑤を取り上げ、具体的な授業行為として「山下中学校版授業UDの視点」を策定した。（図3）

- ア 生徒に安心感を与える、教員のあたたかな表情や対応（②・⑤）
 イ 生徒の目線、姿勢、机上環境、人間関係などを見取る、教室全体への目配り（①・⑤）
 ウ 視覚や触覚に訴える教材・教具や環境設定（③・④）
 エ 簡潔で分かりやすく、テンポの良い発問と指示（①・④）
 オ 教師の発問に対して、生徒が仮説を立てる時間の確保（②・④）
 ※括弧内は、授業UDの7原則との関連を示す。

図3 「山下中学校版授業UDの視点」

(2) 「ワンチャレシート」の改善

「教員同士のフリー授業参観週間」において、授業者と参観者に「ワンチャレシート」を活用してもらい、使用感や改善案を募った。これらの意見と授業実践Ⅰの成果を踏まえ、「ワンチャレシート」の改訂を実施した（別紙資料：完成版ワンシーン・チャレンジシート）。

変更点は以下の2点である。

- ・授業者側の項目に「検討するワンシーンにおける生徒の実態」の項目を設け、校内研究の視点から見た学級の実態を明確にすることで、「検討するワンシーンの場面と具体的な手立て」をより明確にした。
- ・A4用紙両面からA3用紙片面に変更し、左半分を授業者側の記入欄、右半分を参観者用の記入欄とした。

(3) 「ワンチャレシート」を活用した事後検討会

従来の事後検討会では、授業者の指導法に対する助言が中心となり、授業を参観した教員自身の学びに十分につながらないという課題があった。そのため、参観者にとっても、自身の授業改善につなげられるよう、事後検討会の進め方を見直した。

松村英治（2019）「仲間と見合い磨き合う「授業研究」の作り方」³⁾で示されている「①語り合う内容を明文化すること」「②授業の事実に基づいて語り合うこと」の2点を参考にし、上記(2)②で示した「ワンチャレシート」の参観者用の記入欄に、事後検討会用メモを設けた。この欄では、「教師の発問とそれに対する生徒の反応」「教師から生徒への声掛け」「生徒の変容」など、授業中に見られた教師や生徒の具体的な言動を記録し、共通の視点で授業を見取るようにしている。

さらに、検討会の流れを以下の手順で整理し、内容の明確化を図った。

① 本検討会の意図の確認（司会）

この事後検討会は、授業者の授業実践を参考とし、研究の視点への迫り方や授業改善の手立てを皆で語り合うことで、参加者全員の指導力を磨き合うことを目標とした検討会である意図を伝える。

② 「ワンチャレシート」の記録を基にした、授業に有効だった手立ての確認（参観者）

「教師の発問とそれに対する生徒の反応」「教師から生徒への声掛け」「生徒の変容」など、授業の客観的な実態という共通の視点を持って授業の分析に当たること、研究授業を適切に評価し、実態把握的な協議を目指す。

③ 授業をしての所見・感想（授業者）

参観者が見取った「授業の客観的な実態」を忌憚なく発言できるように、授業者の感想は後半に位置付ける。これは、授業者の意図と実際の授業とのずれを指摘することを目的とするのではなく、参観者の見取りを基軸とする検討を重視するためである。

④ 研究授業で得たものを今後の授業に生かす方法（授業者・参観者の両方）

授業に生かす方法を考えたり、話し合ったりする時間を確保することで「見せ合う・語り合う研究授業」の本質に迫る。

このように、授業者と参観者が「見せ合い、語り合う」ことで、双方に学びが生まれる検討会が構築できると考えた。

(4) 成果

① 研究授業のねらいの明確化と、参観の視点の共有

「ワンチャレシート」の活用により、授業者は校内研究の視点を踏まえ、自身が特に工夫したい点や、授業改善の方向性を明確にした上で授業を構想できるようになった。

授業者からは、「授業の中で意識すべきポイントが明確になり、準備段階から授業の流れを意識するようになった」との感想が得られた。

また、授業のねらいや検討したい場面が事前に共有されることで、参観者にとっても授業のどこに着目すればよいかも明確になり、教科の違いに左右されにくい参観が可能となった。

特に、中学校において課題となりがちな専門教科の違いによる参観や助言の難しさが緩和され、教科を越えて授業を見合う関係づくりにつながった点は大きな成果である。

さらに、授業の一部を時間指定で参観できる仕組みとしたことで、参観に伴う時間的負担の軽減にもつながった。

② 事後検討会を通じた授業改善と実践への活用

研究授業後の事後検討会において、「ワンチャレシ

ート」の事後検討会用メモを用いることで、感想の共有にとどまらず、授業の事実在即した具体的な協議が行われるようになった。また、事後検討会の目的を「授業者と参観者の双方の授業改善」と明示したことにより、参観者自身の授業を見直す視点で意見交換が生まれた。

さらに、「ワンチャレシート」の活用から約1か月後に行った調査では、授業者から「授業の中で力を入れる場面を意図的に設定するようになった」「他教科の実践から得た学びを自分の授業に生かしている」といった感想が得られ、研究授業の振り返りが日常の授業実践に生かされていることが確認された。

このことから、「ワンチャレシート」を軸とした事後検討会は、教員の授業観や実践を変容させ、継続的な授業改善へとつながる手立てとして機能していることが明らかになった。

(5) 課題

① 事後検討会用メモを取ることの難しさ

「ワンチャレシート」の事後検討会用メモでは、「教師の発問とそれに対する生徒の反応」「教師から生徒への声掛け」「生徒の変容」などの記録を取ってもらうことで、客観的な視点から事後検討会の協議を進める意図があった。しかし、参観者にとって記録の方法が分かりにくい場合があることや、授業全体を見取るには慣れが必要なことも明らかになった。

今後は、記入例の提示や時系列で記録できるようなガイドを付けるなど、記録欄の改善を通して参観者全員が共通の視点で記録できる工夫が求められる。

② 事後検討会の意図の事前共有

事後検討会では、参加者が「ワンチャレシートのねらい」や「当日の検討観点」の共有の程度に応じて、発言の焦点が異なる場面が見られた。特に、初めて「ワンチャレシート」を使う場合には、司会役の教員も進行の見通しが持ちにくく、結果として議論の流れに差が生じる可能性がある。

今後は、事後検討会の話題の焦点を絞るために、「ワンチャレシート」を使った事後検討会の展開例を事前に教員全体に示しておくことや、司会者用の「進行例」や「問いかけ例」を整えて共有することで、研究のねらいに沿った議論の流れを確保し、事後検討会の質を高める工夫が必要である。

5 研究のまとめと今後の展望

本研究は、校内研究を「特別な場」から「日常的な学び合いの場」へと転換することを目指し、研究主題を「日常的な相互参観を基盤にした、学び合う校内研究の構築」として取り組んできた。

授業実践Ⅰ・Ⅱを通して、授業者・参観者双方にとって研究授業の目的をより明確化させるとともに、研究授業に主体的に取り組むきっかけとして「ワンチャレシート」の活用を進めてきた。

授業実践の成果として、授業者にとっては研究授業のねらいや改善の方向性が明確になり、授業改善への意識が高まったことが挙げられる。また、参観者にとっては授業の見方が明確になり、自身の授業改善に結び付く協議が可能になった。さらに、事後検討会が授業者・参観者双方の授業改善を促す場として機能し、教員同士が実践を通して学び合う校内研究の在り方が具体化した。これらの成果は、校内研究の目的である「教員が学び合う文化の形成」に向けた確かな前進である。

一方で、授業の事実をどのように記録・共有するかという課題や、事後検討会の質を高めるために展開例を事前共有する必要性など、更に改善すべき点も明らかになった。これらの課題を踏まえ、次年度以降は以下の2点を中心に研究を深化させていく。

(1) 「ワンチャレシート」の事後検討会用メモの改善

授業の事実を的確に記録できるよう、参観者がどのような観点で何を記入すればよいかを具体的に示した記入例を整備する。また、授業者・参観者双方の視点が共有できるように、「ワンチャレシート」の構成や表記を再検討する。

(2) 「ワンチャレシート」の汎用化の検討

本研究で得られた成果を基に、授業UDを視点とする研究に限らず、他のテーマ（例：言語活動の充実、思考力の育成、ICTの活用など）であっても応用できる形で、「ワンチャレシート」の使用法をマニュアル化する。そして、校内研究の主題や学校規模に応じて柔軟に活用できる仕組みとすることで、他校でも実践可能な校内研究モデルとして発信していきたい。

また、このマニュアル内で事後検討会を視野に入れた参観者の授業記録例や事後検討会の展開例を示すことで、事後検討会の質を高める。

今後も、「ワンチャレシート」を軸とした研究授業の仕組みを改善・発展させながら、教員同士が日常的に「見せ合い・語り合う」習慣を更に根付かせていくことを目指す。そして、全ての生徒が「分かる喜び」を実感できる授業づくりと、そのための持続可能な校内研究体制の構築を進めていく。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示)」
- 2) 菊池哲平 (2024) 『授業UD新論 -UDが牽引するインクルーシブ教育システム-』 東洋館出版社
- 3) 松村英治 (2019) 『仲間と見合い磨き合う「授業研究」の作り方』 東洋館出版社

【図表等の許諾について】

図1、図3は、自身で作成した成果物である。
図2は、引用・参考文献2)からの引用である。